

エルツの畫室であつたが、彼れの死去の後、政府がこれを買上げたのであるといふことだ、彼れはベルジツクの人で、一八〇六年に生れ一八六五年に死去した、彼れの作品は多く豪放不羈で、用筆は誠に自由である、其着想の奇抜なることは人をして驚嘆せしむるものがある、けれども彼れは其當初にありては最も正確なるクラシツク派より起つたのであることは陳列されてある畫を見てもよく判かる、序だから彼れの畫の二三を紹介しよう



犬 イエツル 筆

- 〔一〕 肖像
 - 〔二〕 火傷したる小兒
 - 〔三〕 聖母
 - 〔四〕 白耳義婦人の發砲
 - 〔五〕 犬
- 彼れは又彫刻も巧妙なものだ、其例として此處に載せて置く
- 〔六〕 彫刻 (次號に)
- (以下續出)

名家談片

○ 繪でも彫刻でも、それを陳列して人に觀せるために展覽會といふものがあるが、其會場の一區劃は、繪の大きさに比例した適當のものでなくてははいけぬ。大きな繪が小さな室に在るのもいけないが、小さな繪が大きな室に並んでゐるのもいけない、水彩畫の如き殊に其感が深い、まアワットマン四ツ切以下の繪なら陳列場は十坪位ひの處がよい。

○ 今度の太平洋畫會に、アンリーマルタンの繪が一枚來てゐる。繪は一枚で、しかもマルタンとしてはあまり傑作の方でもあるまいが、失禮ながら此一枚と、太平洋畫會出品の全部と秤にかけたらドツチが重いかかなアハ、ハ、ハ、ハ、

* * *